# 築百二十年 古民家『聴福庵（ききふくあん）』

ミママモルジュメールマガジン

〈特別企画　聴福庵特集〉

2017年12月　干し柿づくり

# 子どもに関することわざ

**【生みの親より育ての親】** 自分を生んだだけの親よりも長い間苦労して育ててくれた養い親に、より深い恩義を感じるということ。

**【老いては子に従え】** 年をとったならば何事も子に任せて、それに従った方がよいということ。

**【親思う心に勝る親心】** 親のことを思う子の孝心よりも、親が子のことを思う愛情の方がより深いということ。

**【親が親なら子も子】** 親がだめなら、その子も似たようにだめだということ。親子を非難していう言葉。

**【親に似ぬ子は鬼子】** 子は親に似るものだから似てない子は、人間ではなく鬼の子だということ。転じて、子が親よりも劣る場合、悪い振る舞いなどをする場合に言う。

**【親の恩は子で送る】** 親から受けた恩には自分が子を立派に育て上げることで報いるということ。

**【親の心子知らず】** 親の子に対する愛情を子は理解せずに勝手に振る舞うということ。

**【親の光は七光】** 親の威光・名声が大きいとその子に及んで、いろいろと恩恵を受けるということ。親の名声・社会的地位が子にとって大きな助けとなるということ。

**【親は親子は子】** 親は立派でも子が悪い場合、その逆の場合があって、子が親に似るとは限らないということ。また、親は親、子は子それぞれ別の考え方・生き方があるということ。

2017年10月　『こども縁日』夜空に灯る赤提灯

**【孝行のしたい時分に親はなし】**親の苦労が分かり、親に孝養を尽くそうと思った年代には、もう親が亡くなってこの世にはいないということ。親が生きているときに孝行しなさいという教え。

**【此の親にして此の子あり】**父親がすぐれているから、こうした立派な子が育つということ。反対の意味で、「親が親なら子も子」と同じように用いられることも多い。

**【親の目は贔屓目】**親は子を実際よりもよく見てしまうということ。

**【親はなくとも子は育つ】**実の親がいなくても、子はどうにか大きくなっていくものだ。世の中のことはそれほど心配することはないということ。

2017年元旦　床の間

**【子は親を映す鏡】**子は親に似て、親を見て育つから、その子を見れば親の人柄や教養などが分かるということ。

**【子は鎹（かすがい）】**二つの材木をつなぎ止める鎹のように、子どもへの愛情によって夫婦仲が悪くなったときでもその仲を保たせるものだということ。

**【子は三界の首枷（くびかせ）】**人間の情愛は深いもので、子への愛着・苦労のためにその一生を束縛されるということのたとえ。「三界」は過去・現在・未来。

**【子を持って知る親の恩】**自分が親となり子を持って、初めて親の恩愛の深さやありがたさが分かるということ。

**【子に勝る宝なし】**子は何物にも代えがたい宝だということ。

2017年6月　梅酒の仕込みの様子

2017年11月　中庭の紅葉

**【獅子の子落とし】**自分の子に苦しい思いをさせて力量を試し、這い上がってきた者だけをりっぱに育てるという意味。

**【児孫のために美田を買わず】**よい田地を買うなどして財産を残せば、子孫は仕事もせずにのんきな生活を送ることになり、かえって子孫のためにはよくないことから。

**【小さく生んで大きく育てる】**小さな赤ん坊を産んで、大きな子に成長させるほうが、楽で賢明だということから。

**【娘三人持てば身代潰す】**娘が三人いれば嫁入り仕度に全財産がなくなってしまうということ。嫁入りさせるのには莫大な費用がかかるということ。

**【親の因果が子に報う】**親の悪業の報いが子に及んで、子が苦しむということ。

**【這えば立て立てば歩めの親心】**生まれた子供が這うようになれば、親は早く立たないかと思い、立つようになれば、早く歩くようにならないかと思う。

**【立っている者は親でも使え】**急ぎの用事があるときには、近くに立っている人が親であっても遠慮せずに手伝ってもらえ、ということ。

**【冷や酒と親の意見は後の薬】**冷や酒は飲んだあと時間が経ってから利き始め、親の意見も後日になってから思い当たり、そのありがたさが分かるということ。

**【可愛い子には旅をさせよ】**かわいければかわいいほど、その子を甘やかせて育てるよりも、世の中に出して苦労させた方がよいということ。

# 『聴福庵』
# 2年目の取り組み

職人さんそれぞれに専門分野があり、同じ『聴福庵』を見ても観る観点が異なり、
たくさんの方に支えられ、家が建っていることに感慨深くなります。

井戸を一目見ただけで手掘りしたほうがいいと即断されたり、壁をトントン叩いて中の様子を把握したり、
職人さんの家を観る眼差しに、我が子を安心して預けられる、そんな感覚を何度も感じました。

『聴福庵』は、子どもたちに遺したい暮らしを伝承していく施設として、昨年から取り組みが始まりました。

職人の世界でも後継者を育てることは重要なことで、そのためには場数が必要です。
ですが、現在はその機会も少なく、『聴福庵』は熟練した職人から若手の職人へ技術だけでなく、
職人の心も伝承する場にもなり、若き職人さんを育てることにも一役買っているようです。

## 2017年4月 〜 2018年3月までの作業スケジュール

| 場所 | 内容＼月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | 家祈祷 | ■ | | | | | | | | | | | |
| 屋内 | お手洗い和紙張り | | | ■ | | | | | | | | | |
| | 床の間土壁修繕・砂鉄塗り | | | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | | | |
| | 玄関唐紙張り | | | | | | | ■ | | | | | |
| 屋外 | 外壁塗装柿渋塗り | | ■ | | | | | | | | | | |
| 中庭 | 大地鎮・井堀祭 | | | ■ | | | | | | | | | |
| | 井戸掘り | | | | ■ | ■ | ■ | | | | | | |
| | 中庭外壁塗装 | | | | ■ | | | | | | | | |
| | 中庭剪定 | | | | | | | | | | | | ■ |
| 離れ | 風呂小屋上棟式 | | | | | | | | ■ | | | | |
| | 風呂小屋づくり | | | | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | | |
| | 風呂小屋瓦葺き | | | | | | | | | ■ | ■ | | |
| | 風呂小屋塗装・入口廻り | | | | | | | | | | ■ | ■ | ■ |
| 台所 | 台所壁面漆喰塗り | | | | ■ | | | | | | | | |
| | かまど作り・乾燥 | | | | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 煤竹張り | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |

■ 作業実施時期

## 【和紙】

福岡県の秋月で130年以上続く老舗和紙製造の4代目になられる井上賢治さんに、聴福庵の内装に用いる和紙を漉いていただきました。

風合い豊かな和紙は、どの一枚とっても同じものはなく、自然に育まれた逸品であることを感じます。

今後は各部屋の障子紙も井上さんに漉いて頂いた和紙に張り替えていく予定です。

かつては、秋月に20軒以上あった和紙処も今では井上さんの所のみだそうです。

伝統の手漉き和紙

## 【地鎮祭】

宮司様に来庵頂き、地鎮祭（大地鎮、井堀祭）を執り行って頂きました。一つは風呂小屋を建てるため、もう一つは埋めていた井戸を掘り起こすため、ご祈願して頂きました。

地鎮祭　2017年6月23日

## 【井戸掘り】

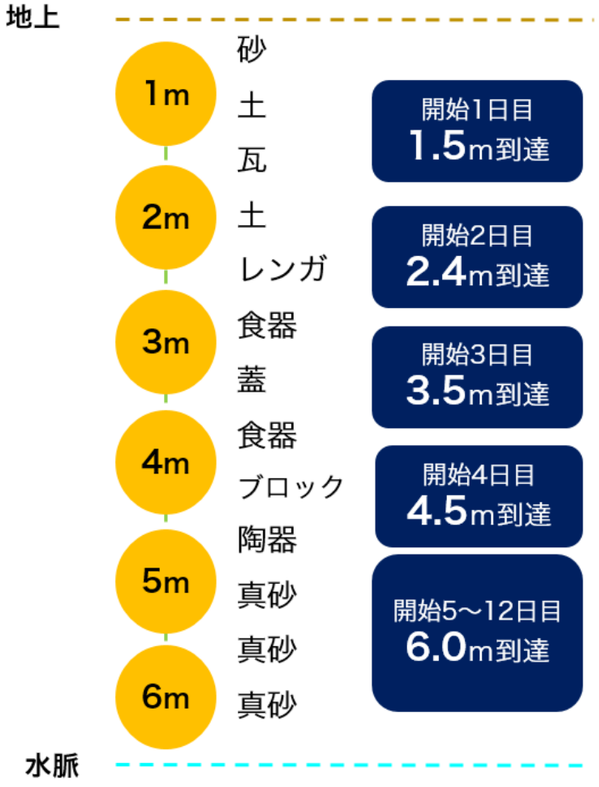
井戸水は風土の水であり、自然の恵みを頂くこと。

ある方から「水神様が出たがっている」。その一言が井戸を掘るきっかけとなりました。

坪庭にあった井戸は土で埋められ、その形跡は丸く淵取られ、そこに井戸があったであろうということを推測するしかない程の跡でした。現代のボーリングという西洋技術ではなく、手掘りによって約7メートルの井戸を掘り抜きました。冷たく透き通った水と出逢えた時は歓声があがりました。昔は水神様として井戸を大切にしてきたといいます。それは暮らしの中心に井戸があり、家族のいのちを支える存在として水は欠かせない感謝の念が自然と湧いてきます。

井戸には水の神様が宿っていると言う言い伝えがあり、昔から埋めてはいけないということも言われているそうです。

埋める際にはお祓いをし、埋める材料には川砂や砕石などが使われ、コンクリートや廃材は決して用いてはいけないようですが、食器や廃材など様々なものがありました。




図：井戸掘りの過程で運び出した物と深さの関係

石の大きな塊

井戸から運び出した食器やブロック

### 『聴福庵』当主の野見山は、古井戸について以下のように語ります。

私にとっての甦生は、この古井戸の甦生と同様に現代ではいならなくなったものを拾い、それを新しくしていくプロセスを通して子孫へと伝承していくものです。

ただ水が欲しいから井戸を掘るのでもなく、ただ珍しいから竈を使うわけではありません。

本来、大切にしてきたものを粗末にしていく現代においてなぜそれが大切であったのかを教え諭すためです。

学問が今ではただの受験勉強のようにすげ換っている様相を見せる現代において、本来の学問とは教えずにして教え、学ばずにして学ぶものであったということをこの寺小屋のような古民家甦生を通して伝承していくのです。

日本の家は私たちの日本的精神を磨かせ、日本の道具や暮らしはそれを活かすことによって文化を伝道してきた継承の仕組みを支えているのです。

①スコップ一本で掘り始めました

②身長の高さ程の深さ

③4.5m から見上げた景色

④6m付近で水が出ました！

## 【上棟式】

いよいよ今日は聴福庵の離れの上棟式を迎えることができました。ここまで来るのに 1 年半以上、復古創新の実践の一つとしての風呂場にするために古来からの智慧を結集して建築します。

風呂桶は 60 年前の大きな奈良漬けの樽と明治頃の炭で沸かす桶風呂を甦生し、建具は時代物の格子戸をはじめ蔵戸や板戸と甦生し、屋根は古建築の智慧を甦生し、床下は菌を用いた発酵床に備長炭と水晶を設置し、玄関の踏み石は古代の六方石を甦生し、壁面の塗料は柿渋と渋墨を用い、ご鎮座する神様は禅宗の跋陀婆羅菩薩をお祀りし、古材の板と水場は古瓦によって装飾されます。

その風呂やシャワーの水は仲間と一緒に手掘りした井戸水を用います。そして明後日には、屋根に上り呼吸する伊賀の土を用いて伝統の瓦葺きを仲間と一緒に行う予定です。

2017 年 11 月 15 日「聴福庵離れ上棟式」かんながらブログより

## 【湿式工法―瓦葺き】

三重県の瓦職人野殿さんに来庵頂き、瓦葺きを土葺きによって行いました。

この土葺きというものは、 近江大津の瓦工である西村半兵衛によって発明された平瓦と丸瓦が一体化した「桟瓦」が発明され、その瓦の風と地震対策として土葺き工法が行われたといいます。

この土葺きは湿式工法とも言われ、野地板の上に杉の皮などの下葺き材を敷き、その上に粘土を乗せ、その粘土の接着力で瓦を固定していく工法です。

ただ関東大震災後に建築基準法に「瓦葺に在りては引掛瓦の類を使用し又は野地に緊結すべし」という言葉が追加されて今ではほとんどが土を使用しない「引掛桟工法」になっていきました。

土葺きの減少は著しく、ほとんどが土のない屋根で軽量化された瓦を用いられています。今では重要文化財や国宝など旧工事法を保存しなくてはならない建造物だけで、一般住宅で見かけることはほとんどなくなっているといいます。

2017 年 11 月 18 日湿式工法の瓦葺き１　かんながらブログより

## 【竈づくり】

福岡自然農園の発酵した土５００キロを使ったかまどづくり。
道具を用いて土を叩き、土を重ね、コテを使いならす作業を繰り返しました。
かまどの下処理作業を行い３ケ月程掛け、土を乾かしていきます。

この土は、自然農で 7 年間共にした田んぼの土を用いそこに淡路の土や石灰、井戸掘りで出てきた粘土などを混ぜて作り上げていきます。すべての土もまた身近にあるもので、ご縁があったものを活かして甦生させていきます。

この竈は、竈の神様である三宝荒神、その横には愛宕神、火伏の神様たちをお祀りしている真下にあります。
暮らしの中心にある火は、竈の神様と共に私たちの人生を支えてくれる存在です。

これらの存在を自分たちの手で甦生させていくことはいのちの火を甦生することで、先祖代々から今までずっと一緒に生きて助けてくださった日本の暮らしの道具と共に再び歩もうとする決意でもあります。

①福岡自然農園の土

②土台となる形を整えます

③土を載せ叩いていきます

④重ねては叩くの繰り替し

⑤コテを使い形を整えます

⑥火を入れる口を成形

⑦50 人前を炊くかまどの完成

## 【風呂小屋】

井戸を掘り、樽は漬物屋から譲ってもらい、屋根の瓦は、瓦職人に教わって葺き、踏み石は石屋さん、大工や左官、多くの職人さんが関わり、ついに聴福庵の離れが（風呂小屋）完成しました。

露天風呂の如く、洗い場は寒いのですが湯船に浸かると、言葉にならない「はぁ〜」という声がつい漏れてしまいます。

湯の温かさはもちろんなのですが、井戸水を沸かした湯に足を伸ばして浸かれる『聴福の湯』は有名温泉にも劣らないと思うのです。

夏の井戸掘りは汗水垂らして作業に当たり、色々な想いも相まって浸かる湯の温かさは、極楽そのものです。

基礎作り

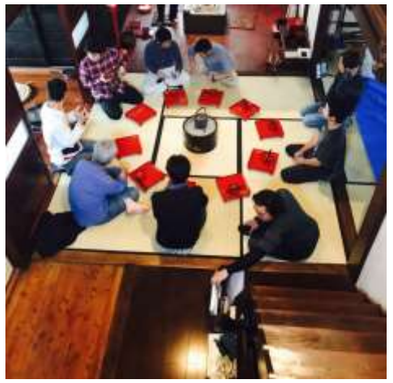
棟上げ

鋳物付き風呂（一人用）

洗い場

内装は渋炭で塗装

大人 5 人程が浸かれる浴場



## 【砂鉄塗り】

明治から大正時代に塗られていた壁で砂鉄を蕨粉（わらびこ）で塗り固める技法の講習会が聴福庵を会場にして行われました。当日は、九州の左官職人さん達が、20 名程集まり、技術の伝承が行われました。

いつもお世話になっている大工の棟梁は、砂鉄塗りされた床の間を見て、
「どこから見ても鏝の跡がない、きれいだ」と言ったといいます。

同じ職人が見ている中で、鏝一つで仕事をする左官職人にとって、
文字通り『小手先』では通用しないことを感じます。

『聴福庵』当主の野見山は、「親方は、あえて彼にさせたのかな。真剣に打ち込む姿には、心打たれるものがあった」と言っていました。

『聴福庵』と呼ばれるはるか昔、幸袋の地に居を構えた頃、
同じように床の間を仕上げた名もなき職人さんは何を想ったのでしょうか。

「この『トコ』という響きは、『トコシエ（永久）』、『トコヨ（常世）』と
同じ音を持ち、古来から「永遠」という意味で語られる」と、野見山は言います。

『聴福庵』の床の間（永久の間 トコノマ）で、次代の左官が何を感じ、
どんな想いを馳せるか分かりませんが、『聴福庵』がある限り、
技術も伝承され続けると思うのです。永遠に。

### 砂鉄塗りをする前の床の間

表面を剥いでいくと、以前は石炭が使われていたことが判明しました。
一般的には使われない石炭が使われ、以前の主人は傾奇者であったことを伺わせる片鱗が時代を超えて明らかになりました。

## 【煤竹】

富山県にある築200年の古民家から煤竹を譲り受けました。

煤を被った竹を水拭きし、蜜蝋で磨いていくときれいな飴色が輝き出します。長さも太さも異なり、中には癖のある曲がった竹まで様々です。一本一本丁寧に磨いていきました。

天井の作業は作業がしづらく中々進みません。竹の大きさに合わせながら、針金で仮止めし、紐で本留めしていきます。

むき出しの天井が煤竹で敷き詰められ雰囲気が一変しました。昔の家屋は木を燃やして煮炊きしたので、柱や天井がだんだんと黒くなり、木材に染み付いた煤は防虫効果を発揮したと言います。

飴色の煤竹天井

## 【天神祭】

菅原道真公の遺徳を偲び、その生き方から学びます。

第一回 天神祭（暮らしの甦生勉強会）を行いました。この『聽福庵』の地域の氏神様が天満宮である由縁があり、古来より寺子屋を始め日本の私塾ではこの天神様をお祀りして子どもを見守り学問が成就するようにと祈りを捧げてきたといいます。

当日は、東京都にある新宿せいが子ども園の藤森平司園長に「子どもにとっての学問とは」をテーマに講演をしていただきました。25日は菅原道真公の誕生日と薨去とした日で、8月25日に勉強会を開催しました。

寺子屋の雰囲気で行いました

## 【漆喰塗り】

左官職人さんのご指導のもと土壁に塗る漆喰を糊づくりから行いました。

昔ながらの技法で海藻をコトコト煮込み、漆喰を調合して壁面に塗り込みます。土は自然物、その時々の気候や湿度、温度によって状況も異なり、調合を繰り返す左官職人の姿に、古来から伝承されてきた伝統工法の重みを感じました。

見ていると、簡単そうですがやってみるとコテの動かし方が非常に難しく、素人と職人さんとではその差は歴然です。

並んで塗るとその差は歴然

朝の光の陰影

## 【唐紙】

寛永元年（1624年）京都に創業し、江戸時代より続いてきた日本唯一現存する唐紙屋『唐長』。唐紙師のトトアキヒコ氏ご協力のもと、玄関の襖を2種類の唐紙が貼られました。

『聽福庵』の真向かいには、炭鉱王、伊藤伝右衛門の邸宅があります。その妻、白洲雅子が愛したと言われる「枝桜」。夜には満開の桜が咲き誇ります。

白洲雅子も愛した枝桜紋

「しふく刷り」で染められた文様

次号に続く